
○ ○ な彼女と ○ ○ な俺 ~ 短編集 ~

ヒリュー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

。。。な彼女と。。。な俺　　↓短編集↓

【Nコード】

N0593Y

【作者名】

ヒリユー

【あらすじ】

色々なカップルの物語？

ダメダメな文章力

かなり遅い更新ですが

読んでいたたければ

幸いです

甘えん坊な彼女とへたれな俺（前書き）

そこそこ短い話を

いろいろ書いてきます

気が向けば

その2とか書くかも

あと、地の文を

ラノベを真似して書いてるので

それらを不快に感じる方は

見ない方がいいかもです

甘えん坊な彼女とへたれな俺

「ただいま」

俺、霧牙 亜窠（きりが あくる）は幼馴染兼彼女との家に帰ってきた

「おかえりなさい、あーくん」ニコ
笑みを向けてくる彼女が俺の幼馴染兼彼女
紫鳴 恵理菜（しめい えりな）だ

「その呼び方やめろって言っただろ」

「二人きりなんだもん、だめ？」

俺の顎下までしかない彼女が下から見上げながら聞いてくる

「うゝ、じゃ二人だけの時はいいよ」

強く否定できないのは理由がある

それは以前、この事について強く否定したところ泣きわめかれ
なだめるのに時間がかかったからだ

とりあえず彼女について説明しようと思う

まずかなり甘えん坊だそして泣き虫だ

さらにさらに、若干依存症傾向が見れる

これについては下手をすると悪化する

今のところの依存度は一緒に寝ないと泣くぐらい、高校生だから止
めときたいのだが

と、このようにだいぶ危ない

「で、恵理菜、夜ご飯は何？」

「えりちゃんって呼んでくれないと教えない」

ぷくーと頬をふくらます

可愛いがフグにしか見えない

「くっ、え…えりちゃん夜ごはん何？」

パアアとか聞こえてきそうな勢いで笑顔になる

「あのね、今日はね、がんばってハンバーグ作っただよ」フンス
褒めて褒めてという

瞳でこちらを見ってくる

「偉い偉い、がんばったんだな」ワシャワシャ
頭を少し乱暴に撫でる

「うん、がんばったんだ」

えへへーとか言っているがこっだけ見たら

小学生ぐらいにしか見えない会話だ

まあ見た目も中学生ぐらいなのだが

- - - - リビング

「ほら、食べて食べて」

「いただきます」

俺は食材と作ってくれた人に感謝とか言うたってつけたような言葉
の後

恵理菜の作ったハンバーグを食べる

「どう？どう？」

目をキラキラさせながら訪ねてくる

正直言つとそこまでおいしくない

だがそれを言ったら泣くだろうから

無難な言葉を口にする

「まあ、いいんじゃない？」

「うわああああん！」

泣きだした

「何で泣くんだよ？」

「だって、最後妙に疑問形だったしい！おいしくないみたいなんだ
もん！」

俺とした事が

言葉のチヨイスをミスった

もう15年も一緒にいるのに

やっちまった、早急にフォローしないと

「うまいよ！超うまい」

右手で身振り手振りしながらフォローする

「…うそだ」

「う、嘘じゃねーよ！」

「うそだよ！知ってるもん！あーくんうそついてる時右手だけでジエスチャーするもん！」

ぐ、そんな癖があつたのか
どうフォローしたもんか？

等と考えている間も恵理菜は

「うわあああん、おいしくなかったんだー！でもこれからうまくなるから嫌わないでえー」

等と可愛い事を言いつつ泣いている

もう少し見ていたいがいい加減泣きやませないと

またお隣さんが苦情を言いに来る

「えりちゃんそんな事じゃ嫌いにならないから泣きやんで？今泣きやめば願い事俺に出来る範囲でかなえてあげるから」

「グスツ…ほ、ほんと？」

泣いて赤くなつた目で見上げてくる

「ほんとだよ」

「じゃあじゃあ、チュウして？」

「えっ、それは」

「してくれないんだー！うそつきー！」

また泣き出してしまった

「してあげるから、泣かないで」

「ほんとっ？」

「ほんとだから、眼閉じて」

「わかった、ん」

目を閉じこちらに顔をつきだしてくる

しなきゃ泣きやんでくれそうにないしな

恥を捨てろ俺！

ちゅっ

という効果音のようなキスを恵理菜の頬にする

「これでいいか？」

「うわあああん！」

何故泣き出す！why！

「何で泣く！？」

「だって今のチュウじゃないもん！チュウは口にするものだもん！」
なっ！マウストウマウスを希望か！このわがまま姫は！？

「口じゃないとやだやだやだぁ！」

「でもいいのか？こんな時に初めてで」

「いいもん！あーくんにならいつだって初めてをあげるもん！」

おおっ

なんだか勘違いされそうな言い方だ

「ならするぞ？いいんだな？」

「いいよいつでも」

また目を閉じこちらに顔を突き出してくる

恵理菜がここまでしてくれてるんだから

俺も勇気を出さないと男がすたる！

「い、いくぞ」

ちゅっ

と、今度は頬ではなく唇にキスをした
ただ唇をふれ合わせるだけの軽いものだ
が

初めてのキスに俺の心は満たされていた
高校生にもなつて何中学生みたいなこと言っ
てんだという突っ込み
はやめていただきたい

別に俺がへたれなのではない
無理やりしてしまうと恵理菜を泣かせてしま
うかも
という思いがあつたから同棲して2年だが初
めてのキスなのだ
「ん」

恵理菜が息苦しそうな顔をしたのでキスをや
める

「これでいいか？」

「うん、しちゃったね」

顔を真っ赤にした恵理菜が俯く
結構こんなことはあるのだが

今日はそんな仕草さえも愛おしい

「恵理菜、ちよつとこつちにおいで」

向かい側に座っている恵理菜に手招きをする

「なあに？」

とここ、というような歩き方で

こちらに寄ってくる

「ここに座れよ、テレビも見やすいぞ」

そう言いつつ俺は胡坐をかいている自分の膝
の上をたたく

「いいの？いつもは頼んでもやってくれない
のに」

首を少し傾げながら聞いてくる

「いいぞ、今日は記念日だからな」

「なんのお？」

ちよこん、と俺の膝の上に座ると

また聞き返してくる

恵理菜のお腹に後ろから手を回し抱きすくめる
そして耳元で

「初キスの」

と囁く

すると恵理菜が

「キス気持ちよかったね、もう一回して?」

と、提案してくる

だから俺は恵理菜のお腹を撫でながら

もう一度囁く

「だーめ」

「えーなんで? もういつかいしようよー」

「馬鹿暴れんな」

「しーよーうーよー」

「わかったよ、寝る前にな」

「約束だよ?」

不安げな目で見上げてくる

それに対し俺は

「約束するよ」

と、若干強い口調で約束する

「これから毎晩だからね?」

「ああ、分かってる」

やっぱり、依存度が上がった

でも俺はこの愛おしい彼女といつまでも一緒にいたい
添い遂げられればいいな

甘えん坊な彼女とへたれな俺（後書き）

地の文って

難しい

痛感してます

弱気な彼女とSな俺（前書き）

Sとか書いてますが

Sっぱさがたりないかも

弱気な彼女とSな俺

突然だが俺、紫藤 憐（しどう れん）はSだ。ドSではない。
そんな俺だが彼女が二人いる。

二股じゃない、なぜならきちんと両者の了承を得ているからだ了承を得るのにかなり時間がかかったが、

今日はそんな二人のうち一人にいたずらを仕掛ける

仕掛けるのは、

穹逢 瑠香（くあい るか）

とても気も体も小さく、気弱という言葉がぴったりな子だ
いつも一人で本を読んでいるし

人とぶつかれば絶対に自分から謝るし

誰かと喋るなんて俺ともう一人俺の彼女としか喋らない

そんな彼女にいたずらを仕掛けたい

例えば本を読んでいるときに抱きついてみたり

彼女のプニプニな頬を引っ張ってみたり

など、してみたいことは山ほどある

同棲しているので家でもいいのだが家だともう一人の方もいるので
まず、瑠香がいる図書室に行こうと思う

- - - - - 放課後・図書室

瑠香はいつもの席にいた

いつもの席というのは、図書室の奥にある席で

周りを本棚で囲まれそこに至る道は一つしかない

それにそこにある本は古くほとんどだれも近寄らない

というよりこの時間に人はほとんどいない先生すらも
だから、大胆なことだってできる

たのしみだ

ポンと瑠香の肩に手を置く、人差し指を立てて

「ん？」プニツ

振り返った瑠香の頬に指が当たる

「よっ、瑠香」

瑠香の頬をいじりながら話しかける

「あう、こんにちは、隣君」

「まったくいつになったらその他人行儀な喋り方治るんだよ」といいつつ瑠香に後ろから抱きつく

「ひゃ、は…恥ずかしいよ、れんくん」

「なに？首触られて感じちゃった？瑠香は性感帯多いからな」片手を瑠香のおなかに回し裾から中に入れるそして撫でまわす

「あ…や、あう」

「顔真つ赤にしちゃって、可愛いな瑠香は」

「ひゃ、お…おへそ、だめえ」

「だめ？じゃあいいや、隣座っていいだろ？」

「と…となり？いいよ」

瑠香から手を離すと

「ありがと」

隣に座る

また瑠香は本を読み始めてしまった

そうだいい事を思いついた

「ねえねえ？」

瑠香を呼ぶと

「なに？」

こちらを振り向く

その瑠香の顔に

「ん!？」

キスをした

唇と唇をこすり合わせると

「ん、んふ…、ん」

恥ずかしさからか体を震わせ声を漏らしている
1、2分ぐらいキスをしてから
体を押される感触があつたから体を離す

「どうした？」

「恥ずかしいから、や…やめて」

顔を真っ赤にして訴えかけてくる

そんな彼女を抱きよせ耳元で囁く

「どうして？もつとしようよ、恥ずかしい事」

フルフルと首を横に振ると

「い、いや」

と、拒否してくる

弱気な彼女にしてはがんばったのかもしれないが

予想の想定内だ

ゆえに、対応策も練つてある

「嫌なんだ、へえー、じゃあいいや家に帰って花蓮とするから」

俺が立ちあがりながらそう言つと袖を掴まれた

「か、花蓮ちゃんとするの？」

うるんだ瞳で聞き返してくる

俺は袖を振り払い

出来る限りの冷たい視線と声色で返す

「ああ、花蓮なら俺の言うことなんだって聞くしな。それに、俺拒否する人嫌いだし」

ちなみに花蓮というのはもう一人の彼女だ

俺の言うことは何でも聞き、俺を見るといつでも横か後ろをついて回る忠犬のような奴だ

瑠香は俺の「嫌い」という言葉を聞くと顔を青くして目じりに涙を溜めたそして俺の腕にすがりつく

「あのね？は…恥ずかしいことも我慢するからね、お…お願いだから、き、きら…嫌わないで」
大きな瞳から涙を流し出した
こうなればこっちの物だ

俺はさつきとは打って変わって瑠香を抱き優しい声で囁く
「冗談だよ、俺がお前を嫌うわけないだろ？」

「ほ…ホント？」
グスグスと鼻を鳴らしながら抱きついてくる

小柄な瑠香の涙をぬぐってやり、頬を撫でながらさらに囁く
「ほんとだよ。それに俺だってこんなところでお前の可愛い顔が他の奴に見られるのは癪だしな」

「わ、私も憐君以外に見られるのはやだ」
ギョツと抱き締める力を強めてくる
「ま、家でするけどな」

瑠香は一瞬迷ったが決めたようだ
「私、家でだったらいいよ？」
言ってから恥ずかしくなったのか俺の胸に顔をうずめる
そんなちよつとした仕草も可愛らしい

「じゃあ、早速家に帰ろうぜ」
「花蓮ちゃん迎えに行かないと」
「あいつなら校門で待ってるだろ」

「なんで？」

「もし、俺が迎えに行かなかったら何があっても校門で待ってるって言ったから」

「じゃあ早くいかないと！」

「あせんなくても大丈夫だよ」

そう言いつつ瑠香の頬にキスをする

「あうっ、恥ずかしいよう」

「続きは家に帰ってからだな」

俺が歩きだすと

「あ。ま、まってよう」

追いかけてくる

今回は大成功だ

さすがに泣かしてしまったのはやりすぎたかと思ったが

今度も暇があつたら

やってみようかな

弱気な彼女とSな俺（後書き）

Sっぽさは足りていたでしょうか？

楽しければいいと思います

次はどんな彼女にしようかな

小さい彼女と大きい俺（前書き）

今回は

体格差がすごいカップルの話

始まり始まり

小さい彼女と大きい俺

「ねえ、こっちとこっちどっちがいいかな？」

俺の前に突き出される2枚の小学3年生ぐらいの女の子が着るようなシャツ

片方は、ピンク色のハートと水色のハートがプリントされた可愛らしいもの

もう一つは、黒地のシャツに後ろに可愛いくまさんがプリントされているもの

「こっちのがいいんじゃないか？」

そう言いくまさんの方を指差す

「ほんと？じゃあちよつと試着するからついてきて」

「わかった」

俺は別に妹の買い物に付き合ってるわけではない

俺の「彼女」の買い物に付き合ってるんだ

この状況は俺の「彼女」がとても小さいから起きたことだ

高校生なのに身長が147cmあるか、ないかなのだ

それにここは俺にとって居心地が悪い

それは俺の身長が原因だ

なぜなら俺の身長は170cmぐらいだからだ、へたをすると17

5cmいつてるかもしれない

そんな奴が子供服売り場にいたら不審者だと思われる

現に「彼女」が試着中に警備員に4回声を掛けられた

そいえば紹介がまだだった

俺の名前は九柳 瀬威斗（くりゅう せいと）

彼女の名前は那瑠誅 藍（なるせ らん）

ともに高校2年生だ。あと同棲している
かなり両親の許可を得るのに時間がかかった

等と、くだらないことを考えていると

「どうかな？かわいい？」

先ほどの、くまさんシャツを着た藍が出てきた

「可愛いんじゃないか？」

「もうなんで疑問形なの！？」

憤慨した藍が突進してくるが片手で制止する

まあ、体格差がこれだけあれば当たり前だ

「悪い悪い許せよ、な？」

捕まえていた藍を持ち上げる

所謂、高い高いだ

「ちょ、ちよつとやめてよ」

「ははっ、わかったよ」

笑いながら藍を下ろす

「でも可愛いのはほんとだぞ？」

「何で疑問形なのかな？まあいいや、じゃこれ買ってくるから入口
待ってて」

着て帰るのだろうか

着たまま行きやがった

にしても何であんな子供っぽいやつを選んだんだろう高校生なのに
いまじゃ子供服でも結構大人っぽいのがあるのに
やはり体格が小さいと精神も幼いのだろうか

「それはないか」

「何一人でブツブツ言ってるの。はやく買い物済ませて帰ろうよ」
買い物を済ませ戻ってきた藍が文句を垂れる

「色々考え事があるんだよ高校生になるとな」

「むー、何その達観した言い方私だって高校生だもん」

怒りながらへそのあたりをたたいてくる

「はいはい、そう言うのは学生証なしで宝くじ買えるようになってから言え」

「あ、私今日ハンバーグ食べたい」

「都合の悪い話から逃げるな。なんでハンバーグなんだ？」

「だって昨日のお隣さんの話からハンバーグって聞こえたんだもん」
「あゝ」

お隣さん、俺の悩みの種の一つだ

なんだか知らんがしょっちゅう泣き声が聞こえる
うるさいったらありやしない

育児放棄か何かと思って心配したら隣に住んでたのは
歳が一つしか変わらないカップルだった

まあ、それから意気投合し、お互い大変ですねと今ではいい友達だ

「だから、今日ハンバーグがいい」

「わかったわかった。えーと野菜はほとんどあるから、帰りに精肉
店に寄っててくか」

「やったー！ハンバーグだあゝ」

「はしやぎすぎだ」

「うれしいんだもんねえゝ」

「じゃ帰るか」

「かえろゝ！」

右手を突き上げ
にこやかに叫ぶ

「はしやぐなっつの」

「もうすっかりくらいねゝ」

藍の言葉どうりもうすっかりそとは

暗かった

「もう7時だからな」

「じゃ早く帰らないと寝る時間になっちゃうね」

「毎日思っんだがお前は寝る時間が早すぎないか？付き合わされる俺の身にもなれよ」

「だってどうしても10時には眠くなっちゃうし一人だと怖いんだもん」

何かを思い出したかのようにブルッと体を震わせる藍

「あのさ、昨日してくれた寝るまでがきしめてくれるの今日もやつて？」

「おまつ、恥ずかしいから口に出すなよここ外だぞ」

「あれしてくれるとぐっすり眠れるんだよね」

「話を聞けよ」

などと他愛もない会話をしていると

「あの君たち、ちょっといいかな？」

お巡りさんが声を掛けてきた

「はい、なんでしょう？」

「あのね、こんな時間にこんな小さい子を連れまわすなんて何してるの。君それでも兄かい？」

この人には俺たちが兄妹に見えた見たいだ

「ちがうよ、私たちは恋人だよ」

こいつ余計なことを言いやがって

ほら、俺を見る目が疑いから確信に変わったじゃん

「君こんな子に何言わせてるの」

「ほんとだよ！」

「あのほんとに恋人なんですよ、ほら」

俺はポケットを探り学生証をとり出す

俺はこういう事態に備えて

いつも二人の学生証を持っている

それが良かったみたいだ

「あ、ほんとだ、すみませんね」

そう言うとそのくさと

気まずそうにお巡りさんは去っていった

だが俺は見逃さなかった帰る間際に見せた表情

「うわー、こいつロリコンかよ」

みたいな顔

これも悩みの種の一つだ

そう、こいつの体格のせいでロリコン扱いを受ける

俺は別にロリコンじゃない

言い訳がましいが本当の事だ

藍以外の女に興味がない

ましてや藍みたいな体系の小学生なんて

アウト・オブ・眼中だ

ふと隣の藍を見ると俯いていた

「どうした俯いて？」

問いかけると申し訳なさそうな顔で見上げてくる

「ごめんね、私のせいでしょっちゅう今みたいなことされて」

藍は藍なりに気を使ってくれているようだ

「はあ、気にすんなよ。俺はお前と付き合うつて決めたときに今みたいなのは覚悟済みなんだよ」

ワシャワシャと頭を撫でながら慰める

「ほんとに気にしてない？大丈夫？」

「大丈夫だよ、気にすんな。さっさと帰るぞ肉が傷んじまう」

「そう？じゃあかえろっか」

「ねえ、ハンバーグまだあゝ？」

「せかすな、今できたから」

「やったハンバーグだあゝ」

うれしそうな顔でハンバーグを頬張る藍

まったく可愛いなこいつは

ドングりを頬張ってるリスみたいな頬つぺたを

プニッとつついてみる

「ほえ？」

「なんでもねえよ、さっさと食わねえと冷めちまっぞ」

「ひゃい」

食うのを再開する藍

ホントうまそうに食ってくれるな

いつまでも見てたいな

「って俺もいい加減食わねえと俺のが冷める」

- - - - - 食後

「まあまあうまかったな」

今回の我ながらなかなかの出来だった

「すっごいおいしかったよ」

「さて、片づけするから先にテレビ見ててくれ」

「わかったよ」

トトツみたいな効果音がつきそうな

走り方でテレビのほうへ向かってゆく

「おわったぞ」

「あ、早く早く」

「はいはい」

俺が正座をすると

そこに藍が頭を乗っけてくる

まあ良く言う膝枕だ

「普通これって男女反対じゃないか？」

「だって私じゃ小さすぎるもん」

「まあ、知ってるけどな」

「じゃあ言わないでよ」

「はいはい」

優しく藍の頭を撫でる

「ふぁ、眠くなってきたやつた」

早いよ！

でも可愛いな

ほれた弱みってやつかな

いかんいかんどうも膝枕をすると

思考が乙女になるな

「眠いなら寝ちゃっていいぞ」

藍がウトウトしてきたところで

「うわぁぁぁん！」

はぁ、例の泣き声だ

藍が何事かと目を覚ます

「もうあと少しで寝れたのに！文句言ってきたー！」

「たまには自分で行けよ」

ぶつくさと文句を言いながらもしっかり行こうとしている
自分が悲しくなってくる

「早く言ってきたー！」

まあ、何かと悩み事は尽きないが
藍がいればそれだけで俺は

幸せだ

小さい彼女と大きい俺（後書き）

次は

1部からここまでの

人たち鉢合わせ

みたいなのをやろうかと思えます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0593y/>

。。。な彼女と。。。な俺　～短編集～

2011年11月13日13時52分発行